

# 2頭のトラの物語

## Tale of two tigers

Nature Vol.436(754)/11 August 2005



東南アジアの研究ハブをめざす2つの国家は、対照的な軌跡をたどった。

1965年にマレーシアとシンガポールが2つの国家に分離した直後から、両国の科学政策が生み出す実績には大きな格差が生じるようになり、それは今でも広がり続けている。

エンジニア出身の実業家 Philip Yeo の巧みな指導のもと、世界で最もダイナミックな研究環境の1つがシンガポールで創出されている。同国の科学政策の責任者となった Yeo が作り上げてきたシステムにより、同国のバイオテクノロジーは、未来に対して明るい希望をもてるようになった (Nature 2005年8月11日号 p.767 参照)。シンガポール政府の表現の自由の保証に対する姿勢には若干の疑問があるものの、同国は、あまり「ひも」のついていない研究助成金と国際協力に役立つ国際的な研究環境を提供し、外国から一流の研究者と多額の企業投資の両方を引き寄せることに成功した。

このシンガポールでの成功は Yeo 自身のエネルギーと影響力に依存していることに対する懸念が、一部で表明されている。しかし、ひとりのリーダーによる監督よりもまちがいをなく長続きする能力主義は定着しており、そのことを示す十分な証拠がある。たった20年の間に、シンガポールには、とくにゲノミクスと癌研究に強い生物学研究の重要な地域ハブが確立されたのだった。

マレーシアも科学において確固たる役割を果たそうと試みたが、あまり成功していない (Nature 2005年8月4日号 p.620~621 参照)。国内にバイオテクノロジー産業を構築する試みは、失敗に終わっている。なかでも最も顕著な失敗例が、クアラルンプール近郊で行われた BioValley プロジェクトだった。相当程度の政治レベルでの折衝を経て、最先端の研究に特化することが大いにうたわれた独立系の大学が創設されたが、国際競争力を確立できずにいる。

マレーシアの抱える問題の1つは、同国生まれの中国系やインド系住民、外国人よりも同国生まれのマレー系住民を優遇する教育、雇用政策である。総人口の半数以上を占め、経済的にも社会的にもあまり恵まれていないマレー系住民に雇用の機会を確保するための措置を講じ

たいと考えるマレーシア政府の立場は理解できる。

しかし既存のシステムでは能力主義が十分に浸透しておらず、雇用や助成金の分配に関する意思決定が人脈によって大きく影響されることが多いとする非難の声は大きい。マレーシア政府内部でも科学政策の決定に十分な自律性は認められていない。それに BioValley などのプロジェクトにおいては、人材ではなくインフラストラクチャーに多額の投資がなされていた。

アジアの中で、政府の政策運営の失敗によって科学が悪影響を受けているのは、もちろんマレーシアだけではない。中国や日本、その他の諸国でも、人材面より施設面に対して過大な投資がなされる傾向、研究助成金の公正な評価における問題、近隣諸国やその他の国々からの科学者との共同研究体制が不十分なことなどがみられる。

**「シンガポールは、アジアでの共同研究を盛んにさせるうえで中心的な役割を果たせるかもしれない。」**

シンガポールの成功は、この点で有用なモデルとなり、アジアでの共同研究を盛んにさせるうえで中心的な役割を果たせるかもしれない。これまで東アジア諸国間での共同研究は、けっして容易なことではなかった。たとえば、アジア太平洋分子生物学ネットワーク ([www.a-imbnet.org](http://www.a-imbnet.org)) は、欧州分子生物学研究所 (ドイツ・ハイデルベルク) の建設に助力した欧州分子生物学機構のような、より強固な基盤を構築しようと何年も努力を続けている。

一流の研究者を引きつけているという最近の実績からいって、シンガポールは、アジアでの共同研究を行うための理想的な場所だと考えられる。また、シンガポールは、これまで激しい競争によって数々の共同研究を頓挫させてきた中国や日本、韓国の研究者の架け橋の役割も果たせるかもしれない。それによって、Yeo がシンガポール国内での成功を勝ち取った手法の一部を他国に応用できるようになるかもしれないのだ。